

「適応力」の育成という 入学前教育の新たな視点

長崎大学アドミッションセンター 准教授 **木村拓也**

多くの大学が、主にAO入学者を対象に、学習の継続や学力の底上げを目的とした入学前教育を実施している。その中で長崎大学では、大学教育を先取りする体験機会を与えながら、入学後の意欲の維持や適応力の獲得に重点をおく、従来にはない入学前教育をスタートさせた。この取り組みについて、企画・実践スタッフの一人である木村拓也准教授に聞いた。



きむら・たくや

東北大学大学院教育情報学教育部博士後期課程中退。京都大学経済研究所助教を経て、2009年から現職。長崎大学広報戦略本部広報戦略オフィサー兼務。大学入試センター入学者選抜研究機構客員研究員。博士(教育学)。専門は教育計画論・教育測定論。

講義や座談会で 大学の雰囲気を感じ

長崎大学は、2011年度のセンター試験を課さないAO入学者に対し、アドミッションセンターが中心となって、入学後のビジョン形成を念頭においた学部共通の新しい入学前教育を実施した。該当するのは、教育学部、経済学部、環境科学部、水産学部、工学部に進学する生徒だ。

入学前教育のプログラムは、①大学での学びへの転換を図る2泊3日の合宿学習(12月25～27日)、②通信添

削教材・Web教材・自習課題などの宿題とSNS(Social Network Service)による学修支援(1～3月)、③基礎学力確認テスト(3月末)で構成される。①と②が、学力のほか入学後の適応力の育成をもねらいとしたものだ。

合宿ではまず、大学での授業がどんなものなのかを体験させた。外国語の講義では、単語や文法の暗記が中心の受験英語から、積極的に海外の人々とコミュニケーションを取るために外国語を学ぶという姿勢への転換を図り、論文作成技法では、ゼミ形式でグループ討論の時間を設けた。科学実験では、長崎大学が持つ、大

学や研究所ならではの実験装置を用いて、フグ毒分析実験を行った。加えて、心身の健康に関する講義とキャリア教育についての講義も行った。授業は大学の講義室やホールで行い、実際の大学の講義の雰囲気を事前に体感してもらうよう努めた。

合宿におけるもう一つの重要な要素が、学生チューターを囲む座談会だ。

座談会は大きく2つに分かれている。1つは、自分が進む学部・学科で具体的に何を学び、どのような研究をするのかを知る座談会だ。学部・学科ごとに分かれてそれぞれに所属する学生チューターが加わり、授業の内容や選択のしかたについて実体験に基づいた話をする。2つ目は、学部・学科の枠を取り払い、サークル活動やアルバイト、生活事情など大学生活の情報を得るための座談会。テーマごとの小グループに学生チューターを2、3人ずつ配置。生徒には興味のあるテーマを2つ選ばせ、途中でグループを替えて、複数の学生チューターとかわりを持てるように工夫している。

長崎大学 AO入学者(※)に対する入学前教育(2011年度)

12月25～27日

合宿

基礎学力確認テスト
講義「全学教育外国語(英語)」
講義「外国の文化と大学で学ぶ外国語の魅力」
講義「心身の健康」
講義「キャリア教育」
講義「論文作成技法」
講義「科学実験講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
チューターによる座談会
学部教員によるカリキュラム説明

1～3月

通信添削/Web学修支援

SNSの活用
課題提出を学生チューターに報告

3月末

基礎学力確認テスト

※センター試験を課さない募集単位に限る

ひと足早い準備開始で 不安の払拭を図る

合宿には、積極的に通信添削教材やWeb教材で学ばせるための布石を打つという目的もあった。以前も学部・学科によっては通信添削やWeb教材での教育を行っていたが、あまり成果が上がらなかった。そのためまず、意識の転換を図ることにした。

多くのAO入学者は、自身の学力に不安を持っている。そこで「AO入学だからこそ、1～3月は大学入学前の準備期間に充てられる。貴重な時間をもらえてよかった」と生徒の意識を転換させることをねらったのだ。「他の入学者よりひと足早く準備ができるのだから、4月からロケットスタートを切れる」と意識してもらうよう指導した。

通信添削に積極的に取り組んでもらおうと立ち上げたのが、AO入学者限定のSNSだ。教員、学生チューターを含め、相互にコミュニケーションできる環境を整え、生徒には、学生チューターに宿題提出の報告をするよう義務付けた。生徒と学生チューターは合宿で交流があるため、提出の促進に奏功した。

このように長崎大学の入学前教育は、入学後の自分の姿を具体的に描かせることを最大の目的とした。進学に当たって、基礎学力の充実が必要なことだが、それ以上に、いち早く大学の授業や学生生活を体験することによって、入学後の適応が早くなり、自分の力が発揮しやすくなると考えた。

また、学ぶ意欲を持たせることも大切だ。就職活動を考えると、実質的な大学での教育期間は短く、短期間



合宿2日目の座談会では、グループに分かれ、先輩の学生チューターと話し合った。

で十分な成果を上げるには生徒自身の積極的な関与が重要になるからだ。

入学前教育の理念を スタッフ間で統一

2011年度の長崎大学のセンター試験を課さないAO入学者は67人。合宿には全員が参加した。生徒および保護者に対する事前告知は、11月に発送した合格通知に同封し、12月15日の入学手続きと同時に参加手続きを行った。さらに遡ると、5月のAO入試の募集要項配付時から入学前教育について予告し、7月の長崎県高等学校進路指導研究協議会で入学前教育を実施する旨のアナウンスをした。

事前準備としては、指導する教員はもちろん、学生チューターも含めて「入学後のビジョン形成」という入学前教育の理念を共有することが不可欠だった。教員とは普段から話し合っていたが、学生チューターとも事前の打ち合わせを密に行い、座談会の内容もある程度方向付けておいた。学生チューターの選考においては、各学部・学科の教員から、「面倒見がよく、後輩思いで、自分の研究についてしっかり語れる学生」を推薦してもらった。

高校へのアピールや 帰属意識の向上も視野に

AO入学者に対する入学前教育は、高校に対する広報活動としても位置付けられる。というのも高校の進路指導において、一般入試>推薦入試>AO入試という意識があることは否めず、AO入学者の質を高めにくい現状があるからだ。充実した入学前教育の広報により、高校の進路指導も変わると考えられる。高校の先生からも、1～3月を無為に過ごしやすいうAO入学者にとって適切な課題だと好評だった。

2011年度は初回ということもあり、いくつかの反省点が挙げられる。生徒の緊張をほぐすのに時間がかかってしまったこと、グループワークの時間を多く取れなかったこと、スケジュールが過密すぎたのではないかということなどである。

しかし、講義の後に、その教員の授業を「ぜひ受講したい」という発言があったり、学生チューターが関与するサークルに興味を示したりと、長崎大学への帰属意識が生まれたことは予想外の収穫であった。こうした意欲・意識は、次年度から積極的に引き出していきたいと考えている。